児童の空間表現と絵画指導についての一考察

A Consideration about Children's Spatial Representation and Pictures Instruction

キーワード：図画工作、空想画、写実、絵画、ドローイング、空間、描画過程

渡邊　洋

Ⅰ．研究の目的

本稿のきっかけは、児童対象に造形指導を継続的に行う機会を得たことで、小学校教科を想定した教育実践と、結果の考察が可能となったことである。

その機会とは、東京女子体育大学の地域交流事業で行われた公開講座である。対象は小学生の児童であり、定期的（概ね月1回／各回1,000円）に開催する短期登録制の有料プログラムである。本稿では、このうち2回（10月27日、11月4日開催）を利用して実施した児童の創作活動を扱う。この講座は、児童を対象に日常で触れることの少ない画材や画面サイズを扱い、造形体験を提供するものである。大学資源の地域還元を通じた交流であるとともに、実践研究の場と捉えている。

ここで扱う活動は、このシリーズのno. 7とno. 8であり、2回継続して取り組む教材であった（表1）。これ以前の6回は、各回とも、紙と描画材を用いた絵画表現を題材としてきた。主に基底材と描画材を変化させて実施している。造形に取り組む児童が、与えられたモチーフの観察を経て、空想を盛り込みながら描くという内容である。この講座のテーマは、タイト

表1．本学公開講座23-24年度的公開レッスン「ドローイングワークショップ」実施概要

no	日時	人数	内容	基底材	大きさ	描画材	モチーフ
1	1月28日	14	ユニフォーム姿で人物クロッキー	画用紙	B4	鉛筆・練ゴム	人物
2	3月26日	6	古代ギリシャの造形を見て スポーツする人間を描く	9mm 厚ベニヤ板	300mm × 300mm	ネオカラー	記憶・写真・画集・ ビデオメッセージ
3	4月28日	5	スポーツを通じて楽しかったこと や、感動したことを描く	9mm 厚ベニヤ	300mm × 300mm	アクリル	記憶
4	5月27日	5	日本画絵具で北斎漫画を描いて みよう	パネルに楮和紙を裏打	B5	水干絵具・膠水	北斎漫画
5	6月24日	4	卵テンペラで人間を描いてみよう	パネルにジェッソで下地処理	F2	卵・顔料	フォトグラフ
6	7月24日	5	大きな紙で人間を型どり 自分を描いてみよう	コットンロール	1500mm × 900mm	ネオカラー	自分
7	10月27日	8	鴨のいる風景を描いてみよう①	ハーネミューレ（洋紙）	780mm × 1060mm	アクリル	鳥類の剥製・記憶
8	11月4日	8	鴨のいる風景を描いてみよう②	ハーネミューレ（洋紙）	780mm × 1060mm	アクリル	鳥類の剥製・記憶
9	11月24日	8	荒巻シャケをよく見て描こう	ハーネミューレ（洋紙）	390mm × 1060mm	水彩絵の具	荒巻シャケ・花束
10	12月22日	8	クリスマス・お正月を作ろう	紙粘土	約２キロ	紙粘土など	なし

全日程午前10時から12時に実施／会場は本学４号館３階造形室

ル通り『描き現すこと』であり、素材や手法を変化させながらその内容を深化させていこうという試みである。『描くこと』によって、児童の興味関心に沿った試行が生まれ、現れる画面が変容する状況を見極めながら、感性を働かせて描画を重ねることが重要であると考えている。また、目指す表現に向き合い、そのねらいと現況を比較して手段を選び方法を探る経験となることも重要である。

誰でも、制作過程で造り込む度合は異なることから、結果としての作品を批評するものではない。しかしながら、作者自身の評価を促す必要もあり、その欲求に沿って指導する必要がある。造形指導で、課題として見いだすべき内容は、それを通じて得る児童が育むイメージへの介入である。この課題を確かめるために、環境整備を変化させて試みる必要があった。

本研究の目的は、児童が描く現場に立ち会い、そのイメージを豊かに発展させるための基礎を得るところにある。実践する指導条件の中で、児童の造形を効率よく展開させるための方策として、環境の整備・構成と効果的な関わり方を考察したい。その要点として、(1) 絵画空間と自己実現について、(2) イメージの生成と技能・素材との関わり、(3) 写実と空間表現の関わり、以上3つの観点から児童の描画プロセスと描かれた表現内容を眺めて整理するものである。

Ⅱ．研究の方法

「鴨のいる風景を描いてみよう」というテーマで、指導実践を行った。このテーマは、写実と空想の連携を促すもので、4つのねらい(①～④)を持って設定した。

前提条件として、この講座は常に内容の告知を行っていない。事前に6度実施しているが、その都度指導に窮することはなく、描くことに抵抗を持った児童が少ないことは、参加児童の特徴として挙げておく。しかしながら、毎日絵を描いている児童ということでもない(ヒアリングによる)。また、将来に画家を目指すという児童が1名含まれている。

①鴨の形や色を見て、良く観察する

見て描くことを促す理由は、造形活動の必須の条件と考えてのことである。形態と色彩は相互に関連する造形要素であり、それは写実的な観点を持ってモチーフを観察するところに育まれ、描画活動において連動する構成要素である。観察で得た視覚情報を、自らのイメージとして画面に構成することは、内的欲求と描画内容との比較検証を経験することにほかならない。

②鴨をみて、風景を連想する

写実に偏らず空想を盛り込む理由として、既知なる空間認識を利用することで、描く内容を物語るように繋ぎ止め、モチーフを軸にした自他の関係性を確かめる作用を期待したものである。また、経験を振返り景色を連想することは、新しい認知への展開を期待した。

③大きな紙の余白に、風景を描く

大きな紙(780mm×1060mm)の設定は、構図を考えなければならないという課題を、導入の段階で強く意識させる意図を持つ。描いた後にできる余白を、事後に考察するのではなく、余白を生かす作用を期待したものである。

④筆の用途と、水の扱いを学ぶ

用具の扱いを経験し学ぶことは、造形力を高めるために必要となる技能経験であり、試行錯誤を生み出すための基礎を提供することである。技材に対する知験を、体験活動へ適宜盛り込み、その活用が実現することも重要である。

実施講座の概要は以下の通りであった。

「定期公開レッスン／ドローイングワークショップ」

講座の日程：平成24年10月27日(土)
　　平成24年11月4日(日)
時間：午前10時より午後12時までの2時間
対象：小学校1年生から6年生
場所：4号館3階造形室
参加者数：8名(男子1名，女子7名)

（準備物）

モチーフ：鴨の剥製2羽

紙：ハーネミューレHA5761（ナチュラルホワイト）

300g/1㎡

鉛筆：HB、2B

絵の具：アクリルガッシュ12色（ターナー）

筆：ナイロン製筆4種

他：描画用具一式

造形指導の概要は、表2のとおりである。なお、結果については後述する。

実施の記録は、静止画撮影と振返りにて記述を行なった。記録した児童の絵画画面は、描画プロセスとしてまとめ、作品ごとに対話の内容を含めた報告を行う。この結果をもとに、造形環境の整備・構成と効果的な関わり方を考察する。

表2．ドローイングワークショップ活動概要

鴨のいる風景を描いてみよう①　10月27日

時間	環境構成	指導展開	実演	働きかけ	児童の活動
10:00	●教室の中央5×4mのビニールシートを2枚敷き活動空間とし5×8mのフロアを設定 ●既設のテーブルは教室の外周を囲むように移動した。	●これから使う、素材について紹介する ●絵の具,パレット,水,筆,ハーネミューレなどの特徴や材質などを説明して触れ方を紹介する。	●定規を使って紙を等分に割き（8分割）児童に渡す。	●描く紙の大きさを意識させる ●紙の厚みや質を確認させる ●素材との対話を促す	●まとまって講師の話を聞いた ●素材に触れる
10:10	●鴨の剥製を2個準備する。	●鴨を見せ、剥製であることを告げる。 ●テーマを告げる。 「今日は鴨のいる風景を描くよ」	●鴨を触る。	●鴨の羽を触るように促す。 ●鴨のいるロケーションをイメージさせる。 ●鴨の生活をイメージさせる。	●講師と「鴨」について話をした。 ●羽毛を触り感触を確かめた。
10:20	●780mm×1060mmサイズのハーネミューレを各児童に1枚準備した。 ●また、ハーネミューレを8分割して各児童に1枚渡した。	●鴨をフロアに設置させる。 ●場所を決め描き始める。8分割した紙は自由に使うように伝える。	●紙を手に持ちその大きさを見せる。	●限られたスペースを有効に生かすように促す。 ●周囲への配慮を促す。 ●鴨を見て好きな位置を探すように促す。	●少しづつ関わって鴨をフロアの中央に設置した。 ●場所を決めて紙を置く。 ●8分割した紙に全員が下絵を作り始めた。
10:30				●鴨のいるロケーションをイメージさせる。 ●鴨をよく見るように促す。 ●鴨の色を見て形を見つけるように促す。	●鴨を観察して描いている。 ●鴨を描いた後の余白を考えて描く。
10:40			●鴨の方向を変えて、戻す。 ●鴨の周囲を歩き回って、観察する。	●下絵描きを終えて、本紙へ描くように促す。	●下絵が描き終わり本紙に描き始めた。 ●鴨を観察して描いている。
10:50		●絵の具の扱いを説明する。 ●筆の扱いを説明する。 ●刷毛について説明し、使い方を紹介する。	●刷毛を使って、広い面を描けることを見せる。 ●刷毛を使って、滲ませながら描く方法を実演する。	●絵の具を使うように促す。 ●全ての色(絵の具）をパレットに並べるように促す。 ●水を与え、紙の上で色が良くのびることに気付かせる。	●絵の具をパレットに並べ、筆洗、筆を準備して描き始める。
11:00 11:10 11:20 11:30 11:40 11:50	巡視	個別に対話を行い指導する。			各自のペースで描く
12:00	●洗い場の設定と乾燥場所の指示 ●終了時点の配置（モチーフ、作品）を静止画で記録。	●次回も描くことが出来ることを説明し、活動の終了を告げる。 ●片付けを指示する。		●しっかり片付けるように促す。	●片付け ●振返り

鴨のいる風景を描いてみよう②　11月4日

時間	環境構成	指導展開	実演	働きかけ	児童の活動
10:00	●教室整備は前回と同様に行う。 ●記録した資料をもとに、前回終了時と同じ配置（モチーフ、作品、用具）に整える。	●前回から引き続いて描くことを伝える。 ●前回描いた内容を思い出せるか確かめる。 ●ハーネミューレが重ね描くのに適した紙であることを伝える。 ●アクリル絵の具が重ね描くのに適していることを伝える。		●前回終了した時と、変わらない環境であることを確認させる。 ●前回使用した材料・道具を確認し、その感覚を思い出させる。	●まとまって講師の話を聞く。
10:10		●用具の扱い方・考え方を伝える。 ●パレットへ出す絵の具の量に制約を与える。	●アクリル絵の具をパレットに出す。 ●実際にパレットで絵の具を溶いて水加減を見せる。 ●パレットで筆先を整える方法を実演する。 ●筆の腰を使った描画と筆の毛先を使った描画を実演する。	●偏った絵の具の出し方をしないように促す。 ●絵の具の実際の色味を観察させる。 ●水加減で色が変わることを観察させる。 ●筆の扱い方で、形が描きやすくなることを理解させる。	●まとまって講師の実演を見る。 ●素材に触れる。 ●各自、描くための準備を行う。
10:20		●刷毛について説明し、使い方を紹介する。	●鴨を触る。 ●鴨の周囲を歩き回って、観察する。 ●刷毛を使って、滲ませながら描く方法を実演する。	●鴨の羽を触るように促す。 ●前回描いた感覚をイメージさせる。 ●水を与え、紙の上で色が良くのびることに気付かせる。	●前回描いた内容を思い出して、各自描き始める。
10:30 10:40 10:50 11:00 11:10 11:20 11:30 11:40 11:50	巡視	個別に対話を行い指導する。			各自のペースで描く
12:00	●洗い場の設定と乾燥場所の指示 ●作品の持ち帰りに対応し、ロール紙（各２枚）と輪ゴムを準備	●活動の終了を告げる。 ●片付けを指示する。 ●児童ごとに振返りを行い、良く描けたところを褒める。		●しっかり片付けるように促す。 ●鴨を見て描けたことと、イメージ出来たストーリーと、工夫して描いたところを確かめさせる。	●片付け ●自分以外の作品を鑑賞する。 ●描いた活動の感想を述べる。 ●講師の話を聞く。

Ⅲ．結果と考察

２回の講座は問題なく終了し、欠席者はなく8種の事例を得ることができた。

1．設定したねらいの達成度

①鴨の形や色を見て、良く観察する

児童に、この設定は適していたといえる。造形において、基礎的な経験である。写実の基礎は、児童には予め備わっており特別な指導が必要と思われない。描画に際し、観察を促すことは重要である。モチーフの状況や、物質の組成、対象の質量などの基礎情報を補うことのほか、多視点から観察することを含め複数の観点で対象を考察する態度を促す必要があった。

②鴨をみて、風景を連想する

低学年に、この設定が適しているといえる。高学年にも対応するが、適切な学習を補う必要がある。

高学年の場合、より具体的な情報を欲するようで、描こうとする対象の取材を補う必要を感じた。この環境下で改善策を講じるとなれば、画像や動画など資料の添付が望ましく感じられた。

図1．児童の空間表現事例に見る描画過程

③大きな紙の余白に、空想を描く

空想画の場合、この設定は適しているといえる。写実的に描く高学年の場合は、構図を推敲してから取り組むため、時間配分が低学年とは異なる。

紙の大きさを、児童ごとに設定することもできる。その場合、画面となる紙の形は矩形に限らず、選択肢を増やす必要が感じられた。

④筆の用途と、水の扱いを学ぶ

低学年はこうしたねらいが適しているが、高学年やそれに近い児童には、色彩の3要素の学習を展望して用具の扱いを指導すべきである。また、感覚的に色彩に触れるためには、写実的学習の方が効率良い。色を再現する（変化させる）ことができるような、そうした指導を盛り込みやすい面もある。実際の指導で、「色味を少し変えてみては」、「色を変化させて」などと対話しても、写実でない部分で展開は難しかった。写実した鴨の表現では、色彩が豊かに変化している。

2. 児童の作品

児童A　低学年（写真1）

鴨の写実は、鉛筆と絵の具双方で積極的に行われた。絵の具（筆）では形が自由にならないが、色彩をよく観察し形を描いている。全体のバランスを整えることができている。

まず鴨を描き、近景、遠景は鉛筆と絵の具で描き、中景は絵の具で直接描かれた（図1A-3, 4）。画面には、俯瞰的な視点が設けられている。近景の左右には、樹木が描かれて図式期の特徴が見える。遠近感は、上下、大小、の対比によって生み出され、水平線を用いて画面を配分している。

中景の成り立ちに水平線が大きな役割を果たした。1回目、中景には何も描かれなかったが（A-2段階）、2回目に中景の余白に街のイメージが挿入される。まず葉脈のように道路が描かれ、空間分割されて奥行きが具体的になる。その図形の中に、建物などが配置された。

写真1．児童Aの作品

児童B　低学年（写真2）

描画過程では、完成までの間にあまり変化のない状況があり、他の説明を要する状況である。1回目から2回目の大半の時間を、鴨の写実（図1. B-1段階）に費やしている。他の部分を手がけるような指導は行わずに、鴨の写実に集中するように働きかけた。結果として、大きな紙の大半が余白として残ったが、本人の判断でその余白に水辺のイメージが付加された。主に、滲み絵（刷毛使用）の技法を選び描かれている。

こうした支援を選択したことには、理由がある。写実によって描かれた線が美しく、観察することを妨げては、恐らく次の展開が望めないと予測された。最終的（2回目11時50分以降）には、奥行のある空間で状況の説明が実現している。画面は、俯瞰の構図となっている。

写真2．児童Bの作品

児童C　低学年（写真3）

画面を見ると、鴨の写実を主体に描かれていることがわかる。空想して展開したのは、自然という内容と思われる。ニュートラルに見ると、鴨がステージに立つようで、切り立った崖があるようだが、作者にその意識はないと思われる。鴨以外の風景は、図式化されているようにも見えるが、よく見ると遠景にある山のボリュームがよく描けている。遠近感は、大小、上下の対比で生み出している。

構図は、鉛筆描き（図1. B-3段階）でほぼ定まっており、鴨中心の描画に終始した。鴨の表現は、その特徴をつかみ量感のある表現が実現した。色彩も良く試している。

写真3. 児童Cの作品

児童D　低学年（写真4）

下絵の段階で、すでに構図が追求されていた。このことは、筆者の予測を超えており、驚きに値する。この児童は描写に長けていて、短時間でも視覚に形態を記憶できると思われる。

1回目は、D-3段階（図1）まで進んだが、手前の余白に対峙して悩んでいた。ここへ、2回目に草花を構成して配置している。その草花も記憶から生み出していると思われる。それは左右のバランスを見ながら配置されており、図式的な配置に見える。画面の大半は、刷毛が使われており、画面構成の中で濃淡による調子を活かそうとしていた。乾燥に時間がかかるため、繰り返して追求することは難しかったといえる。用具として、ドライヤーを準備しておく必要があったと思われる。

構図は、水辺の風景を切り取るものであった。

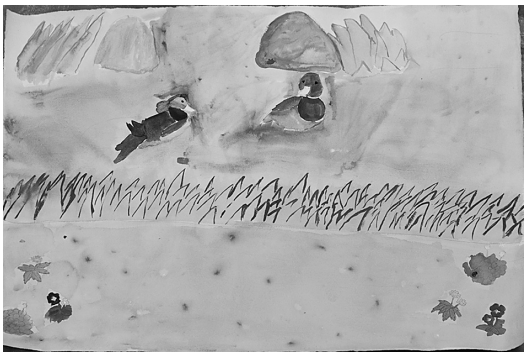

写真4. 児童Dの作品

児童E　低学年（写真5）

鴨の描写ではなく、風景が主体となっている。遠景に山々を見据え、彼方から鴨が歩いてやってきたという説明がされている。2羽の鴨が向き合い楽しんでいて、その近くには、動植物が描かれた。遠近感も、大小、上下の対比を上手に配置して自然な風景を構成している。

1回目に、E-3段階（図1）まで進んだが、その後は描いた内容を明確化するために、筆の扱いなどを説明して形態を整える取り組みへと促したがうまくいかなかった。E-4段階（図1）では、余白としてある箇所に講師（筆者）が対話をして描くように促している。

写真5. 児童Eの作品

児童F　高学年（写真6）

下図、本紙への描画を通じて、計画的に画面構成された作品である。描画過程も段階的で、柔軟に素材と対話する意識が読み取れた。鉛筆の圧力、絵の具の濃淡、描き始めから優しく筆を重ねる配慮があった。しかし、コントラストが控えめであったため、効果として現れていない。明暗（濃淡）と色相（色味）の変化についての気づきを指導の過程で埋め込む必要があったと思われる。

樹木の形態が図式期に見られる特徴に類似して見えるが、この場合は、水平線、垂直線、曲線の構成要素として生かしており、絵画空間の構築を目指した作例ということができる。鴨の動きを一瞬止めるような意識で、画面分割を行なっており、高度な表現を展望している可能性が高いと思われる。

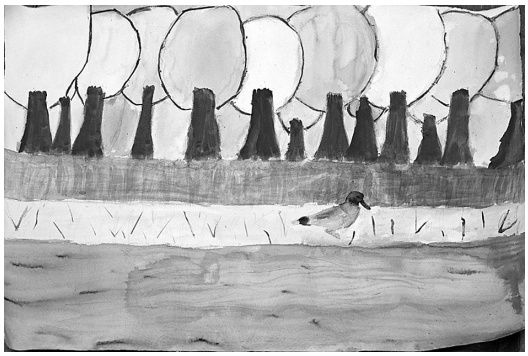

写真6．児童Fの作品

児童G　低学年（写真7）

鴨が描かれる前に、虹と山が描かれた。風景への導入に効果があったものと思われる。物語が描かれており、感性の豊かな表現になっている。画面に大きく描かれた山（大地）には、画面右から画面中央下部に道が描かれている。1回目半ばにして鴨が描かれるが、虹の上を飛ぶことになった。

画面中央に、風船のように空に向かう球型が描かれている（図1．G-4段階）が、これは山間に位置する湖とのことである（ヒアリングによる）。2回目の終盤（11時20分ごろ）、この湖の水は流れ出し、右側山の中腹に拡張した。

写真7．児童Gの作品

児童H　低学年（写真8）

のびのびとした、児童らしい作品である。しかし、作者は多くの葛藤を抱えていたことがよくわかる。まず、鴨をそれらしく描きたいという強い欲求があったが、自身の描画に満足ができなかった。これは、客観的な視点をすでに備えていることを意味している。今後、図式的な表現と写実的な表現のどちらに傾くかわからないが、関心を持って関わりたいと考える。

造形に親しむことが必要であり、興味関心を育てる配慮が必要と思われる。素材との出会いや、技能を生かした表現を体験することが効果的であると思われる。

H-3段階（図1）で展開しにくい時間帯があったが、鴨が水を掻いて泳ぐ音を連想し（対話による）、波立つ水面や水中の脚、遠くに霞む山の表現に展開することができた。

写真8．児童Hの作品

3. 考察

(1) 絵画空間と自己実現について

余白に対して、それを埋めるように配置して描く表現をカタログ表現というが、これは幼児期の発達段階に見る表現様式の一つである。一度経験した様式が、その後に再現されるのは珍しいことではなく、余白にイメージを挿入しやすいというのはむしろ必然であろう。こうした余白の性質と、見えないものを空想させて描く取り組みとして、設定したのが今回の事例である。

余白にイメージを呼び込む発想は、低学年（図式期にあたる）で、不都合のない結果が得られたが、技能を求める学年の場合には、補うべき経験と対話が必要であると思われた。高学年は1事例しかない（図1.F）が、描画過程が明らかに異なっており、画面を構築・構成する意識が現れていた。この場合は、余白の概念を既に消化し、画面を色面で構成する意図を得ていると思われる。

そもそも、余白自体が形を持っていて、それもひとつの造形要素であることや、形を持って描かれた色面が余白に似た役割を空間の中で持ち得ることは、気づくことであってなかなか教授しにくいものである。ただこの気づきは図式期の中に、見いだす機会があるのではないか、と感じられる。

見ることは、描く対象をよく見ることでもありながら、描いている画面を見ることも指している。自己実現を目指す取り組みの中で、児童には葛藤しながらも向き合う姿勢がある。画面の状態に変化がなくとも、その姿勢を肯定し展開を促す支援が必要となる。

イメージを咀嚼して精神性を投影するような意識は、描き確かめるプロセスを繰り返すことで育まれると思われる。それを物質的に実体化させて生まれるものが、造形における空間であり、描きたい内容を見極めて構成することに気付かせるべきである。

図1のDでは、下絵・本紙への描画で、難なく画面に描き表すことが可能だった。視覚と記憶の連携が自由にできる児童であり、見ることに長けている。このように得手・不得手があることも事実であるが、発育発達の過程において特別視する事項ではない。

(2) イメージの生成と素材・技能との関わり

大きな紙を使ったからといって、その大きさに合わせて描くという前提はない。大きな絵を描かせたいというねらいが主ではなかったので、なぜ大きな紙を選んで床に置いたのかまず説明しておきたい。

大きさは、前述のとおり空想を流し込むため、確実に余白を得るためである。床に置いた理由は、1つに画面がよく見えること、2つに立ち位置から描けること。座って描くよりも、ストロークが長く描ける上に、関節の可動範囲も広がるので、描画も柔らかくなることを利点と考えている。今回、前者は効果があったと思うが、後者は残念ながら試す児童が少なかった。次なる機会には、効果的な実演を伴って意識付けをしなければならない。

この事例では、四角い紙を使用している。絵画のための基底材が矩形に限定されてはいないが、市販される用紙は四角く、比率も黄金比となっている場合が多い。こうした状況下で、不定形な紙を用いるには、その目的と指導法を問われることになる。そもそも何の為に描くのかを、問わなければならない。紙の大きさや、材質、形に関していえば、イメージを表すその先に、確固たる目的が有って然るべきである。挿絵なのか、壁画なのか、どこに出力されて、誰が見るのかを経験の中で理解するところまで考える必要があるといえる。

新鮮な出会いが必要なのは、モチーフがそうであるように、素材でも同じである。今回は、ハーネミューレ（ドイツ）という、どちらかといえば高級紙の部類に属する洋紙を用意したのも、そうした意図を含んでのものである。

作品イメージが素材によって支えられることから、素材を生かす技能への興味関心も育てる必要がある。技能を効率よく体験するためには、まず描画の経験を重ねて素材に親しむところから始めねばならない。その上で、使い方や留意点などを知る必要がある。

基礎的な経験は、絵の具を理解するために必須で、色彩教材を楽しむためには欠かすことのできない要件である。扱いとしては筆（本稿の事例ではナイロン毛の面相と学童用絵筆を使用）やパレットが重要

で、特に筆の扱いは奥が深く毛の種類や長さ・量・形によってその用途も分かれてくる。絵の具が粒子であり、筆を通じて粒子を扱うことも、技能が得られれば感じることも可能となる。

(3) 写実と児童の空間表現の関わり

写実は、あるがまま写し取ることであるが、その空間は造形として形を得るのであって、写実対象の複製ではない。見て描く学びは、作者の色や形への好みや考え方を確かめるのに役立つといえる。

空想と写実を組み合わせる教材には、記憶にある感覚を選んで利用しようと促す効果もある。見て描く、想像して描く、相互に関連することで、得られる気付きがあると思われる。

空想のイメージを得ようとしながら、写実的に対象と向き合い、よく見て観察することで、画面に描かれた空間が変化していくことを確認することができた。しかし、余白が無くなると構図が展開しなくなり、装飾的になることも見受けられた。重ねて描く意欲を、育てる必要を感じる結果となった。ここにも技能が関連してくるが、追究という働きかけができる活動展開が必要といえる。

造形的に考えるということが、形や色でイメージを実現しようと、試行錯誤を繰り返して、常に課題を見出そうとする観点を育むものと期待したい。

Ⅳ. まとめ

見ることと描くことの間で、各自が鑑賞への導入を自ら形成している。またそれを、言葉によって促すことができる。描く動機は、常に存在しており、子どもが何を描きたいのか、そうした問いかけも場合によっては有効である。しかし、何でも声をかけ聴けばいいというものでもなく、その機会を選び負担にしない配慮が必要である。

また、描きながら話すというのは難しいことであるから、活動中は極力観察に努め、本来必要とされる援助に傾ける方がいい。

今回、素材との出会いを大切に実施した。テーマの説明より前に扱う素材を見せるようにしているのは、出来上がる作品がその素材によって完成するからである。最初に出会った素材が、形を変え持ち帰る作品になる。

そういった造形のおもしろさを体験することが、児童には必要なことである。

参照文献

1) 文部科学省「小学校学習指導要領」平成20年4月
2) 文部科学省「中学校学習指導要領」平成20年7月
3) 文部科学省「小学校学習指導要領」平成21年3月
4) 建帛社「保育内容造形表現の指導第3版」平成22年10月
5) 大坪圭輔＋村上暁郎編,「美術教育研究」, 武蔵野美術大学出版局, 2002年
6) 高橋陽一監修, 杉山貴洋編集,「ワークショップ実践研究」, 武蔵野美術大学出版局, 2002年